春の道標

黒井千次

春の道標　黒井千次

新潮社版

春の道標

一九八一年二月一五日発行
一九八一年五月一五日二刷
著　者　黒井千次
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　三晃印刷株式会社
製本　神田加藤製本株式会社
定価　九八〇円

© 1981, Senji Kuroi
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

春の道標

装画——李禹焕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

校門から三人、五人とかたまって出て来た生徒達は、伸びかけた麦畑の中の細い道を抜けて五日市街道にぶつかると、そこで申し合わせたように足を停めた。街道沿いには、農家や低い石の門のある住宅、郵便局や畳屋などが雑然と入りまじって並び、その眺めはいかにも郊外のはじまりといった佇いを示している。

「どうした。早くかからないとすぐ二時間くらいたってしまうぞ。」

澱みのように道に溜ったまま動かない生徒達の後ろから美術の教師の声がかかった。ニチカン、クライタッテシマウゾ、と誰かが教師の北関東訛りの口真似をした。イッチカン、ニチカン、とひそめた別の声が歌うように囃した。

絵の具箱が重い、と明史(あけし)は思った。折角の校外へ出ての写生だというのに、彼の気分は結ぼれたままだった。

無器用なほど実直な人柄を感じさせる、そのあまり若くはない美術教師に明史は平素好意を抱いていたのだが、融通のきかなそうな彼の顎の張り具合いが今日は疎ましかった。光風会に所属

する絵描きでもあるという教師の絵を、明史は上野の美術団体連合展で見たことがある。学校から授業の一環として美術鑑賞に行かされた折のことだ。
地味な色調で、椅子にかけている地味な女性の姿が描かれていた。先生の奥さんだよ、と横にいた美術部の跡村が教えてくれた。もっと若くて綺麗な女を描けばいいのに、とそのとき明史は思った。
自分の描く絵のようなくすんだ樺色の世界にこの教師はいつも住んでいるのに違いなかった。
「どこにする。」
道の左右を見廻しながら木賊（とくさ）が明史に声をかけた。
「『僕の前に道はない』のよ。後ろを見なきゃだめに決まってるじゃねえか。」
横から湊が口をはさんだ。得意の咳きこむような笑いを残して肩を振り振り道路を渡ると、彼はろくに位置を選びもせずに腰を下し、無造作な手付きで画用紙を拡げた。
「どこか描かなくちゃいけねんだろ。」
顔の前に両手を突き出し、勿体ぶった表情を浮かべて指で視界を区切ってみている跡村を横目に、明史は街道を歩きはじめた。黙ってついてくる木賊の温かな気配に彼の気持ちは少し和らいだ。
「どこかじゃないよ。道を描くんだよ。」
冗談とも真面目ともとれる鈍重な口調で木賊が言った。
「ずうっとこれは道なんだぜ。」
絵の具箱の重さに逆らって明史は足を進めた。目当てがあるのではなく、ただ足を停めるのが

面倒だったのだ。
道のあちこちに散ってそれぞれの位置を決めた生徒達から離れて、二人はまだしばらく歩き続けた。
「道がなくなりますよ。」
後ろから木賊がわざとらしい声で言った。
「あそこに坐ろうか。」
春日神社の低い石垣が明史の目にはいった。垣の土台に腰を下し、道沿いの小さな溝ごしに足を伸ばすと坐り心地は悪くなかった。
「こっちを描くわけでしょう。」
今歩いて来た方角に木賊が手をあげた。サマータイムに切替えられたばかりの午後の、まだ高い太陽が雲の一点を裏側からぼんやりと光らせている。
「なぜ。」
「だって、光線の具合いがさ……。」
「——俺、そこの道を描くからな。」
明史は唐突にすぐ足元の道路を指さした。所々舗装に穴のあいた目の前の路面を見つめているうちに、それを描こう、と突然思いついたのだ。遠近法に従って先に行くほど細くなっていく〈八〉の字形の真直な街道、その上に両側から被いかぶさっている若葉をつけた欅の梢、電信柱の看板、ポスト、歩く人影……。そんなものの一切見られない、奥行きを拒んでただ舗装の表面だけを切り取ったような絵を描こう、という思いつきが、彼のどことなく屈していた気分によう

やく活気を与えた。

明史は画面いっぱいにどたりと横たえられた道路をひたすら描きはじめた。他の誰とも違うであろうその拗ねた構図が、今の自分の気持ちには一番しっくりするのを彼は感じていた。

明史が口もきかずに仕事をはじめるのを見ると、木賊も画用紙に向い、遙かに延びる縦の遠景を画面に置く作業にかかるらしかった。時折自動車や自転車が走り過ぎる他はあまり動くものもない午後の静かな時間があたりを流れた。

描こうと思って眼を凝らすと、道の表面は意外に明るい灰色だった。そしてアスファルトにあいた穴は小さいほど深く、まるで傷口のように見えた。底には昨夜の雨がまだ溜っているようだった。背にしている境内の欅の樹から落ちたのか、緑の葉が二、三枚、アスファルトに張りついている。

パレットを開き、灰色の水彩絵の具を絞り出し、色を整えようとして明史の目はふと足下にある狭い溝に落ちた。藻に似たどろりと暗いものを揺すりながらどぶ水がそこを走っていた。絵筆が誘われるように伸びて溝に浸った。たっぷりと汚水を含んだ筆はパレットの上に絵の具をのばした。俺の絵を描くにはこの水が最もふさわしい、と明史は感じた。絵の具など溶かさずにどぶ水をそのまま塗りたい気持ちだった。絵筆を走らせると画用紙から臭気が立ちのぼってくるような気がした。咽喉の奥に微かな吐気を覚えながら、しかし明史はひどく満足だった。

おい、見てくれ、と木賊に声をかけようとしてあげた明史の目に、神社の石垣にそって歩いてくる一人の女子高生らしい少女の姿が映った。赤いズックの鞄をさげ、俯きがちに足を進める彼女の周りには、なにか粉をふいたような乾き果てた倦怠の匂いがあった。

――あれはうそです！　みんなうそです！

見砂慶子にあてて叫ぶように書いた自分の言葉が蘇った。これまで慶子に出した数多い便りの内で、それは特別の意味をもつ手紙だった。

明史にとっても、慶子にとっても、手紙は顔を見て話をするのとはまた違った特別の役割を課せられていた。家が近所であり、母親同士が知り合っているというだけでいつか言葉を交すようになった二人の間は、しばらくは遠慮がちな友人といった関係だった。同い年だが早生れのために慶子の方が学年が一つ上であり、学校も明史と違って私立の女子高に通っているためにどこか身につけている雰囲気にへだたりがあり、会っていてもあまり話題ははずまなかった。兄と二人だけの男兄弟の家に育って女学生への興味は大きかった筈なのに、慶子を前にすると戸惑いに似た違和感がいつも先に立った。

慶子の家が都心に引越すことによって事態は変った。これまでのように石坂洋次郎の小説を貸し借りしたり、道で会えば立ったまま話をするかわりに、彼女が手紙を寄越すようになったからだった。慶子との間にもう一つの新しい通路が開くのを明史は感じた。

彼女の大人びた字がまず明史を驚かせた。同時に、文面にところどころ、意外に幼いものの漂っているのにも彼は気づいた。そして手紙の中の慶子は、顔を合わせている時とは別人かと思わせる表情をもっていた。

家が離れたので、会うためには日時をきめ、電車に乗って出かけねばならなかった。そんな後、彼女は必ず追いかけて手紙をくれた。会っている時の自分の姿を慌てて修整し、二人で過した時間の上にそれとは異った光を当ててみせるかのような便りだった。

多少の躊躇いを感じながらも、いざ机に向うと明史のペンは相手の勢いに押され、その調子に従った。書かれているものの中に生きている二人と、実際に出会い、顔を見て声を聴き笑いを交す彼等と、どちらが本当の自分達であるのか、明史にはわからなくなる折があった。それでも、慶子が封筒の内に仄赤らんだ色をいれれば、明史は赤い色で応えた。彼女が積木を三つ重ねれば、彼はその上に四つ目をのせようとした。そうしなければいられぬ衝動に似たものにいつも彼は追い立てられた。時にはそれが苦痛に近いものに感じられる場合もあった。

とはいっても、明史は彼女からの手紙を心待ちにしていた。年上めいた女友達をもっていることにひそかな満足も感じていた。少くとも、慶子からの便りになんとか調子を合わせた返事を書いていることの出来た間は——。

その日、明史は母に頼まれて慶子の家への届け物を預った。まだ五月にもはいっていないというのに、ひどく蒸し暑い曇った日曜日だった。傘を持って行きなさいとの母の忠告を無視して彼は家を出た。

渋谷で電車を降り、広い坂を登っていく間にみるみるあたりが暗くなった。ぱしり、と大粒の水滴が頬を打つのをきっかけに、たちまち激しい雨が落ちて来た。傘を持ってくればよかった、と後悔する暇もなかった。商店の狭い軒下に逃げ込む人や、傘をかぶるように低く構えて進む人が見えた。

どうせ濡れてしまったのだ。母に渡された風呂敷包を腹にかかえて明史は一気に駆け出した。顔をあげると雨が眼にはいりそうだった。黒く流れる道だけを見て彼は突走った。

ずぶ濡れで飛びこんだ慶子の家はひっそりしていた。玄関に出て来た彼女が、まあ、と声をの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んで慌てて奥に消えた。すぐに白いバスタオルを手にして現われた彼女はそれを明史の頭に押しつけ、早くシャツを脱いで拭きなさいよ、と母親のような声をたてた。

いいよ、大丈夫だから、と逆らう明史を板の間に引きずりあげ、肌に張りついたワイシャツを強引にむしり取ると慶子はタオルを彼に巻きつけて座敷に通した。

「誰もいないのよ、今日は。」

謝るような口振りで彼女は言った。これをおばさんに渡すように頼まれただけだ、と彼もぎごちない手つきで濡れた風呂敷包みを突き出した。そのままでは風邪をひいてしまうから肌着も取ってタオルでしっかり拭かなければだめよ、ともう一度言ってから、彼女は思案顔になって居間の方を振り向いた。

「着替えをさがしてくるわ。」

大股に彼女は部屋を出ていった。絞れば水の滴りそうなランニングをつまんで肌から浮かしながら彼は戸惑っていた。雨に濡れたことより、その後の処置の方に彼は困惑した。バスタオルには嗅ぎなれぬ快い香りがうっすらとひそんでいた。

「仕方がないから、我慢してこれを着て。」

慶子は重ねた白い衣類を机に置いて廊下に出ると障子をしめた。その前に彼の手から素速く濡れたワイシャツを奪い取っていた。

「いらないったら。借りて帰ったらお母さんに叱られちゃうよ。」

「いいのよ。私のだから。」

障子越しに怒ったような声が聞えた。

「……慶子ちゃんの……。」
彼は机の衣類にこわごわ手を伸ばした。やわらかな肌触りの袖のない下着があった。ランニングなどと違って襟の刳りの形が浅く、しかもその縁に細いレースがついている。裾の方は中途半ばな長さで断ち切られ、しかも端が曖昧にひろがっている。
「着ないと本当に怒るから。」
「でも、これ、女のだろ……。」
それを着ると自分が猿廻しの猿みたいな恰好になりそうだった。けれど、ひどく着てみたい気持ちもあった。
「ワイシャツ洗ってくるから。」
断乎たる声が廊下に響いて固い足音が遠のいて行く。今迄に考えてみたこともない慶子だった。
もう一枚は七分袖のシャツだった。こちらは胸の前側の縁に小さなピンクの花が縫いつけられている。重ねて着ろ、というつもりらしかった。パンツまではなかったので彼はほっとした。と同時に、微かな物足りなさを自分が覚えているのも意識した。今着なければ、もうこのようなものを身につけてみる機会など一生ないかもしれない、と彼は思った。鼻を近づけてみたがバスタオルにあるような香りはなかった。
奇妙に肌に吸いつくようで頼りない着心地だった。襟がないために首元に力が感じられず、すうすうとなにかが抜けて行きそうだった。上半身が乾いた衣類に包まれると、濡れたままのズボンが急に気味悪く重かった。
「着ましたか。」

廊下で声がした。
「……うん。」
「あけるわよ。」
腕まくりをした慶子が立っていた。
「おかしいよ、なんだか……。」
明史はどんな顔をしたらいいのかわからない。
「おかしくありません。」
無表情に近い目付きで慶子は彼を見た。
「濡れているじゃない、まだ。」
歩み寄った彼女はタオルを取りあげるといきなり強い力で彼の頭をこすりあげた。こわばった異常なものが彼女の腕から彼の中に流れこんだ。
「痛いよ。」
夢中で避けた明史の目の前に慶子の顔があった。歯がぶつかり合った。何が起ったのかわかってから、彼はようやく彼女の肩に手をまわすことが出来た。自分の背中が下から抱かれているのを感じた。一度口唇が離れると、今度はゆっくりと触れ合った。バスタオルにも肌着にもなかった温かな濡れた香りが彼を包んだ。得難いものを手に入れた、という昂ぶりと、こんな筈ではなかった、という狼狽とが彼の身体を駆けめぐった。それでいて、この初めての感触を手放すことは容易に出来そうになかった。雨に打たれた寒さのせいなのか、自分が小刻みに震えているのに彼は気がついた。慶子も小さく震えていた。この後、口唇を放してからどうすればいいのか彼に

は見当もつかなかった。
「ワイシャツを乾かさなくちゃ。」
なにも起らなかったかのような声で彼の耳に彼女が囁いた。乾く筈がないよ、と答えようとした彼の声は不様に嗄れて半分言葉にならない。
「タオルにはさんでアイロンをあてるのよ。」
明史を押すようにして身を翻すと慶子は風呂場の方へ廊下を走って行った。
自分達のしたことをどう考えればよいのか、とつおいつ迷っていた明史のもとに届けられた慶子の手紙は、彼を驚かせた。そこには後悔も逡巡もなく、むしろ自信に溢れた言葉が並べられ、私は母のようにいつも明史ちゃんの傍に立っていたい、という望みまで書き添えられていたからだった。
明史は密かな恐れを抱いた。事態がどう進むかについてではなく、己の感情がそれにどこまでついて行くことが出来るかについてだった。
初めて女性の口唇を知ったことに、彼は深い歓びを感じた。幾度も彼女の口の味を思い出した。関西の大学に行っている兄でさえまだそれを経験していないだろう、と想像すると一層誇らしかった。貴重な卵を身体の中に抱いたような気がした。
しかし一方で、慶子との間に今迄はなかった粘る重いものが生れてしまったのも事実だった。
機会さえ恵まれれば、彼は繰り返し繰り返し慶子と口唇を合わせたかった。けれど、それは彼女が好きだからなのか、と問われるとなんと答えればよいのか迷ってしまう。そんな苛立ちと不安に揺れ動く明史を、彼女の手紙は疑いも見せずにただ自分の色に塗り上げようとしていたのだ。

べとつく糸に手足が搦め捕られるようで鬱陶しく、彼は相手の素振りにふと嫌悪さえ覚えた。
それだというのになぜこうなってしまうのだろう。慶子にあてた彼の返事の書き出しは、「僕のママン！」という呼びかけだったのである。ひとたび踏み切ってしまえば、後は相手の言葉に調子を合わせ、自分で自分を煽り立てていくこれまでの手紙の場合と同じであった。

——甘えて、夜になったら本当にオッパイを飲みにいくかもしれませんよ。そうしたら、やさしく背中をなぜながら、得意のシューベルトだかブラームスだかの子守歌をうたって寝かしつけてくれるんでしょうね。
——もし慶子ちゃんがもう少し近くに居たら、今すぐにも出かけていってひっぱり出し、夜の道を手をつないで歩きながら……。
——それからもう一つ、門の所で別れる時の君の顔を思い出す度に、何故か、
君は僕のものだ
って言う気がしてならない。ごめんなさい。

そして両親の寝静まった家の中でそれを書き終った時には、明史は身を熱くして自分の手紙の只中に立っているのだった。
反動は恐ろしい勢いでやって来た。明史の返事を待ち構えるようにして出された慶子の手紙は、前便を更に煮つめたようなねっとりした調子のものだった。クリーム色の便箋の最後のページには、〈慶子〉という署名の少し上に薄い口紅の色の口唇の跡が押しつけられていた。初めて見る

その印の細い無数の縦皺が気味悪かった。彼の知らない慶子が露骨な姿でそこにいた。
紙を近づけて明史は匂いを嗅いだ。仄かな香料のかおりが感じられた。口唇の形に合わせて彼は口を押しつけてみた。歓びではなく、吐気に近い感覚が背筋を走った。
最早これ以上慶子の動きについていくことの出来ないのを彼ははっきりと意識した。叫ばざるを得なかった。

――あれはうそです！　みんなうそです！　この手紙が着き次第、必ずあれを焼き捨てて下さい。僕は決してあの行為を悔いはしません。永久に悔いないで居られるつもりです。只、その後の手紙に書いたうそを恥じずにはいられないのです。しかし、この手紙には本当のことを書きます。
僕は苦しい。
君が好きでたまらないからではない。
もしそうなら
どんな苦しみでも僕はよろこんで耐えられる。
僕は苦しい。
君が好きかどうかわからなくなってしまったから……。

自然に詩のような形になった手紙を彼は書き続けた。そういう行分けの表現の中でなら、語りにくいことがまだなんとか記せそうな気がしたからだ。――ふられる悲しみより　ふる悲しみの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com